

主要裸麦品種の赤かび病抵抗性

牛 藤 英 夫・平 井 俊 臣

(九州農業試験場)

GOCHO, H. and HIRAI, T.

Susceptibility of naked-barley varieties to scab caused by *Gibberella zeae* (Schw.) Petch.

現在、わが国で栽培されている主要裸麦品種について、その赤かび病抵抗性程度を明らかにし、品種選定の参考資料とするため試験を行なった、その結果を報告する。

試験方法

九州農試(筑後)の赤かび病検定温室に、1975年現在のわが国の主要裸麦39品種を供試した。栽培様式は温室のベットに株間5cm、列間20cmの1株1本立て。1プロット0.15m²、乱地法2反復播種期は1975年12月6日催芽種子を播種。開花期に見里培地で人工培養しておいた赤かび病菌の分生孢子懸濁水溶液を噴霧接種し、その後高温条件に保ち発病を促した。菌接種3週間後に1プロット20穂について発病顕花歩合の調査を行なった。また、各プロット5穂について、菌接種1週間後、2週間後、3週間後と時期別の発病調査を行なった。

試験結果

品種の赤かび発病率(菌接種3週間後)は軽度の発病も含めると40~90%にわたり、高度抵抗性品種は認められなかった。しかし、品種間に明らかに発病率の差が認められ、統計的に有意な差をもつ強弱2グループとその中間に位するグループとに分けることができた。これらの品種の分布は下図に示した。この図からも推察される

ように、裸麦の栽培は西南暖地が主体で、四国と九州で総作付面積の85%にあたる1万4千haにおよんでいる。品種別ではキカイハダカが一番多く総面積の30%、ついでユウナギハダカが24%を占めている。試験の結果、栽培面積の最も多いキカイハダカ、ユウナギハダカが最も抵抗性の強いグループに含まれていた。このことは、赤かび病の発生の多い西南暖地の裸麦の栽培特性として、赤かび病抵抗性の重要度がきわめて高いことを裏付けるものと考えられる。

予備的に行なった時期別発病調査の結果を、侵入抵抗性(菌接種1週間後の発病率で示された初期の抵抗性)と拡大抵抗性(菌接種3週間後の後期の抵抗性)に分けて考察した。その結果、侵入抵抗性品種は必ずしも拡大抵抗性品種でなく、両抵抗性は種々組合された形で存在し、両方とも高い品種は愛媛裸1号および愛媛裸3号であるように推察された。



わが国の主要裸麦品種の赤かび病抵抗性とその分布